地獄の裏切り者

一九九四年八月にクリミアで私は映画を見た。不可解なことだが、私がこの映画を見たのは映画館ではない（つまり、原始時代の神殿に似ている夏の映画館「光（ルーチ）」で見たわけではないのだ）。私はこの映画を、自分自身の閉じた瞼の裏で見たのである。その時、私は眠ってはいなかった。それは真昼のことだった。二時間あまり海で泳いだ後、私はいつもの場所に向かった――糸杉に囲まれた円形の広場で、その真ん中には使われていない噴水があった。ここで私はよく、ベンチのひとつに横たわり、暑い時間を過ごすことにしていたのだ。その時も私は横になり、目を閉じた――何度そんなふうにしたかはもう数えきれない。だが突然、閉じた瞼の裏で、映画の《上映》が始まったのである。その前に私は覚醒効果のある飲み物を口にしていないし、麻薬を服用してもいなかったのにだ。二時間の水泳と八月の公園の美しさという健康増進の手段を、麻薬とみなさないのであればだが。

だが、この映画は映画館で見る、他のどんな映画とも違っていなかった。閉じた目の空間は、素晴

らしい上映ホールになりうるのだ。上映された映画はアメリカの、最新のものだった。けれども、それが自分の映画であることを、私は理解していた。まるで、私が有名な監督で、ハリウッドの誇る最新テクノロジーや巨額の投資にアクセスできるかのように。おそらく、映画を撮りたいという私の隠された願望が（それも刺激的な内容で、製作費が高く、CG技術がたくさん使われている作品だ）、クリミアのシエスタの時間にこの予期しない《脳内上映》を生み出したのだろう。この映画が現実には存在しない以上、私は映画の内容の口演というジャンルに頼らなければなるまい。このジャンルは評判が悪いが、幼稚園ではよくやられている。

映画のタイトルは『地獄の裏切り者』だった。物語が展開するのは近未来というか、二〇二〇―三〇年代なのだが、設定ではソ連がまだ終わっておらず、世界は大国の政治的、軍事的対立という緊張状態に置かれ続けている。その際、大国は変容していて（部分的には、対立が続いた圧力のために）、アメリカの政治システムにおいては寡頭制の要素が認められる。民主的な機関の権力は制限されている。一方、ソ連の権力を支えているのは《共産主義的貴族政治》、すなわちブレジネフ、グロムイコ、グリシンらの孫やひ孫たちだ。これは《退廃主義者たち》、すなわち悪戯っ子のような考えをする、立派な教育を受けながらも堕落した人たちで、輝く青春を楽しめる状況をしばらく前に終えると、衰え行く父祖たちのしみだらけの手から、やすやすと権力を奪い取ったのだ。

映画の主人公は若いアメリカの学者だ。彼は天才的な男で、生理的にも際立っているが、特別な社会的地位を占めてもいる。これは、いつまでも子供じみた紅顔のままの若者で、しかも彼の頭には髪の代わりに、生まれ立てのヒヨコのような、ふわふわした金色の綿毛が揺れている。この綿毛の作る

明るい茂みは風が吹くたび、高く舞い上がったり、震えたりする。彼の名前は覚えていない。レスリー・コインといった感じの名前だった。彼はそのキャリアを麻酔科医として始めたが、その地位は自身の成し遂げた一連の発見によって大きく変わった。彼はペンタゴンの科学調査実験室の組織に招かれ、そこには彼の実験にとって実にすばらしい条件が整えられていた。仮に《ダークブルー・アンフィラード》と呼ばれている古い秘密センターで、彼は新型の大量破壊兵器を作ろうとしていた。同時に表の世界では、神経生理学の講座で大脳辺縁系の生化学についての講義を行っていた。最新兵器の領域での彼の権威は前例のないほど高く、世界情勢が非常に緊張し、悪名高い兵器競争が絶えず方向を変えていたため、参謀本部もホワイトハウスもいつも彼の意見を求めに来るのだった。

《ダークブルー・アンフィラード》の隅で燃え上がった、震える炎の映像で映画は始まった――これはレスリー・コインが、鮮やかな緑色をしたとてつもなく長く、とてつもなく細いタバコを吸い始めたのだ。ライターは子供っぽい彼の顔を照らしたが、その顔では瑞々しさと疲労が奇妙に補い合っていた。最初の瞬間、彼は二十二歳に見えるのだが、やがて彼には決まった年齢のないことがわかる。厳粛なダークスーツと白いシャツを着て、黒いネクタイをしている。背は高く、痩せていて、少しよろめきながら動く。堂々としてはいるが、大きな耳と細すぎる首のせいで、子供が大人の服を着ているように見える。

一方でアメリカ社会は――遠い一九七〇年代がそうであったように――平和主義に席巻されている。インディーズの出版物やテレビが、軍国主義に反対するキャンペーンをいつも繰り広げている。政府や軍産複合体以外で容赦ない批判の的になるのは武器開発に従事する学者たち、中でも大量破壊兵器

の開発者たちだ。コンピューター・ネットにあふれる風刺画やプラカードや侮辱的なアニメでは、そういう開発者が、たとえば体の弱そうな出来損ないの姿で描かれ、そのでこぼこした巨大な頭蓋骨は落ち着きなく冷蔵庫に視線を向けているのだが、その中には「良心」と書かれた氷が保存されている。あるいは、ペンタゴンの乱暴な将軍の胸に守られている、眼鏡をかけた、つやつやした幼児の姿で描かれることもある。とてつもなく古くさいイメージも、忘れられてはいない。たとえば、ドルの記号という変てこな形に背骨が歪んでいる研究室の学者とか、「デス・ブレイン」という辛辣なコミックス・シリーズがその冒険を描いている知能のある骸骨といった類だ。でたらめに放たれたこれらの矢の何本かは、的に命中する。レスリー・コインの同僚の多くが、軍産複合体での仕事のせいで自分が「金目当ての冷酷な人間」になってしまうと考え、研究への参加を拒むのだ。だが、レスリー・コイン本人は、情熱と意欲をますます高めて働く。彼は「金目当て」でも「冷酷」でもなく、そもそも人間ですらなく、いかなるヒューマニズムにも関心がなく、彼の良心はただ、麻酔科医としての良心でしかない。一定のヒューマニズムというものは平和主義者の考えるような軍縮によってではなく（なぜなら、それは破壊や制裁のための、きわめて野蛮で汚らわしい「拷問じみた」手段を事実上、世界に残すからだ）、反対に永遠に続く近代化によって達成されるのだと、つまり、敵を抹殺するための新しいこの上なく精密な、洗練された痛みのない方法を、飽くことなく探すことによって達成されるのだと、彼は考えているのだが、それも根拠のないことではない。「誤って理解されたヒューマニズムは自らの恐怖という確定されたラインによって科学の進歩にブレーキをかけるもので、戦争が犯罪によって繰り返し宣言されることを心配する一方で、残酷さが消滅し、犯罪が事前に防止される可能

性はまったく考慮しないため、実際には忌まわしい苦痛や戦争の歪みを長引かせてしまうのだ」自らの信念と学者としての良心に導かれたコインは、議会の決議を回避し、薬物化学兵器の開発をタブー視せぬよう政府を説得し、平和主義者との論争のための切り札を大統領と政府に与えると、この分野での一連のラディカルな発見をなしとげた。苦しみなしに死をもたらし、破壊や傷を与えず、焼くこともなく障害を生むこともない麻酔兵器の開発に、彼は実際に成功したのだ。環境に影響を与えず、植物だけでなく生物にも害をもたらさない《慈悲深い死》を、生み出したのである。というのも、この武器の薬剤の効果は、人間の脳の反応においてのみ機能するからだ。いわゆる「洞窟の理論」（世界の科学が新しいやり方で、脳における共振の本質を見抜くことを可能にした）を生み出したことを理由にレスリー・コインに授与されたノーベル賞は、実際には（内密にだが）麻酔兵器の分野における研究のために与えられたものだった。ノーベル賞講演を彼は次の言葉で始めた。「私の信条はダイエット用の卵よりもシンプルだ。私は苦痛の敵なのである。苦しんでいる体に罪がない限り、苦痛とは不公正なものだ。痛みは高い人間性という概念をくしゃくしゃに丸めてしまうもので、したがって屈辱の源なのだ。痛みはまた恐怖の源でもあり、したがって卑劣な考えの庇護者である。どんなに不快であろうとも痛みとは我々の身体の番人、つまり、自己保存システムの主要な手段であると言われるが、私は反対だ。この番人は自身が代替不可能であることを理由に、かなり前から暴君になってしまっているのだ。今は確信を持って主張できるが、この代替不可能という話も神話にすぎず、危険な番人は別の、より礼儀正しく正確な警備員に代えることができるはずである。この点について、現代の科学の到達点を無視するわけにはいかない。痛みとは、生についての思考も、死についての思考

も、損ねてしまう毒なのだ。情熱、愛、絶望、極度の疲労、自己犠牲、ヒロイズム――これら思考におけるあらゆる種類の刺激は、死に向かって穏やかに歩んでいく力を、人に与えることができる。だが、それは、死という《誕生》に痛みを伴わない円滑さを付与できる状態だろうか？　セックスや消化が身近なものであるという事実が私たちを困惑させないように、死の身近さにも困惑すべきではない。自らの生を多少なりとも明瞭で清らかな光の中で見るためには、迷宮のような苦難と恐怖の層を生の出口から除去しなければならない。その時、この出口は《ブラックホール》であることをやめ、窓に変わるのだが、この窓の存在ゆえに事物は感知されるものとなり、不明瞭な状況は制限されるのである」

だが、コインは、無痛で「無害」の大量殺戮兵器の開発では満足しなかった。《慈悲深い》武器の開発の後、彼は《愛撫する》武器の探求へ、すなわち、効果が一瞬で、苦痛から解放されるだけでなく、快楽をももたらすという類の、殺人の探求へと移行したのである。死の直前の多幸感と至福を犠牲者に保障する、武器の探求を始めたのだ。ここでコインを助けたのは、様々な麻薬や向精神薬を用いた集中的な実験の年月の間、《ダークブルー・アンフィラード》で蓄えられた経験だった。コイン自身が完全に実験材料と化してしまった。つまり、綿密にバランスを考えた食事と、新たに考案された物質の入れ替えの結果、彼はほとんど人間のものとは思えない、存在の強度の高さを獲得したのだ。彼はシャツの下の手にいつも《注射用ブレスレット》を付けている――これは弾力のある便利な道具で、アンプルに使うミニチュアサイズの弾薬盒を少し想起させるのだが、ボタンを押すと定期的に注射がなされることになる。上映中のこの映画のスタイルは、導入された実験材料のタイプによって変